

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 河須崎 英之

本論文は中国の朝鮮族によって話されている朝鮮語について、異なった6地点の話者を対象にアクセント体系を調査して、そこにさまざまな変種が存在することを明らかにするとともに、それらの体系相互の比較と中期朝鮮語との比較を通じてアクセント変化の方向を明らかにしようとするものである。

中国の朝鮮族は吉林省の延辺朝鮮族自治州を中心に黒龍江省、遼寧省などにも居住している。彼らの出自は朝鮮半島各地にわたっているが、もっとも多いのは北東部の咸鏡道出身者とその子孫であり、そうした話者の用いる朝鮮語も咸鏡道方言に基づいていることが知られている。本論文で対象としたインフォーマントは基本的には咸鏡道型のアクセントをもっている話者で、具体的には、吉林省龍井市、吉林省図們市、吉林省汪清県、黒龍江省牡丹江市、黒龍江省寧安市、黒龍江省鶏東市出身の話者である。調査項目は、体言、体言にさまざまな助詞をつけた場合、用言のさまざまな活用形のアクセントを主としており、特に、助詞によってアクセントの交替を起こす現象や、用言活用におけるアクセントの複雑な交替を詳しく扱っている。

本論文で扱われているアクセント体系の中で、もっとも弁別性が高いのは龍井市の話者で、体言はn音節についてn+1個の型を区別するが、他の地域の話者では、語の長さが長くなるにつれて対立数が減少したり、ある一定の音韻的条件に従ってアクセントの型が決定されるなど、さまざまな形でアクセントの弁別性の減少が見られることが明らかになった。その中には、語形が長くなっても対立数が増えない3型アクセントや2型アクセントに近い体系をもつ話者も見られたが、この地域の朝鮮語にこのようにアクセント体系として多様な変種が存在することを明らかにしたのは本論文が初めてであり、貴重な貢献であると言える。

さらに本論文はこうしたさまざまな変種を比較することにより、それらの間の系譜関係を明らかにするとともに、どのようなアクセント変化が起きたかを推定した。朝鮮語はかつては中央語においても弁別的なアクセントが見られたが、例えば現在のソウル方言などではそれが失われており、本論文で明らかにされたアクセント変化のあり方はそうした点の解明にもつながるものと期待される。

本論文で残された課題としては、アクセントの交替現象の意味することについてのより深い考察や、体系間の比較におけるより厳密な方法の適用などがあげられるが、本論文は、調査が容易ではない地域の話者について詳細な調査を行なって、今まで知られていなかったさまざまなアクセント体系の変種を明らかにしたことと、それらの変種相互の比較によってアクセント変化の道筋を示したことに大きな学術上の意義がある。以上の理由により、審査委員会は、本論文を博士(文学)の学位を授与するに値するものとの結論に達した。